



TITLE:

經濟道と經濟術(三)

AUTHOR(S):

作田, 莊一

CITATION:

作田, 莊一. 經濟道と經濟術(三). 經濟論叢 1922, 14(6): 970-988

ISSUE DATE:

1922-06-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127912>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第四十卷 第六號

大正十一年六月一日發行

論叢

不勞利得税を論ず

法學博士 小川郷太郎

基督教文明の發展概論

法學博士 財部 靜治

社會哲學に於ける主意的二元論的思想

法學士 恒藤 恭

經濟道と經濟術

法學士 作田 莊一

小作制と小作法

法學博士 河田 嗣郎

時論

我邦の地租を論ず

法學博士 神戸 正雄

說苑

ジョン・ロックの私有權論

經濟學士 岩城 忠一

功利主義と生産政策

經濟學士 堀 經夫

雜錄

古川古松軒の著述に就て

經濟學士 黒 正 巖

『共產宣言』の英譯本について

法學博士 河 上 肇

附錄

本誌第十四卷總目錄

經濟道と經濟術 (三)

作 田 莊 一

四 道 德 と 經 濟

經濟道の性質を考察せんとするには先づ道德と經濟との關係を明かにしなければならぬ。此問題は倫理學と經濟學との交渉する所であるが、從來の倫理學は道德一般を論するのが職分であるから、特に經濟の道德性を考へることに冷淡であり、甚しきは殊更に經濟問題を遠ざけ、中には經濟を外道視する傾向さへあつた。又經濟學の方では故意か過失かともかく勝手に狭い領國を定めて其に立籠り道德界と交渉する努力を怠つて居た。然るに近代に於ける生産經濟の躍進的發展と其結果に據つて起れる激烈なる階級闘争とは、經濟を中心とする幾多の社會問題を續發せしめ生活の一部たる經濟が全般の生活に深刻なる影響を與ふこととなり、茲に經濟に關する思想及び行動が深く道德の根本にまで接觸しなければ已まぬ有様となつた。經濟生活は一切の社會生活を支配すると見るが如き、經濟問題は要するに倫理問題であると云ふが如きは如何に道德と經濟との關係が重要視せらるゝかを示して居る。生活資料の生産に就て創造觀を執り得ない現代人は

更に衣食不足の理由を以て子孫の創造をも制限せんとして居る。自然を支配し自由に立脚すると稱する文明人は寧ろ却つて自然を崇拜し之に威服する野蠻人以上に深い迷信を懷くものではあるまいか。廣大なる道德界を知らぬ經濟人は富めるも貧しきも共に強い迷信の旗幟の下に力を盡して戦つて居る。此の痛ましき悲劇は何に由つて止め得らるゝであらふか。孰れか刀折れ矢盡くるを待つに由つてか、將た迷信の旗が引下ろさるゝに由つてか。

道德と經濟とは外形に於て如何なる關係を有するかに就ては、從來の諸説を大體次の三通りの見解に要約し得ると思ふ。其一は生活内容より見たるもの、其二は生活價值より見たるもの、其三は生活の規範及び方面として見たるものである。以下順次に之を述べやう。

其一 生活内容より見たる道德と經濟

此見解は我等の生活内容の相違を以て道德と經濟とを區別して二者の關係を見るのである。或者は道德と經濟とは目的生活と手段生活との關係に立ち、道德は人が人としての生活の目的又は理想を決定し遂行することであり、經濟は此目的を達する手段として外界を利用し生活の條件を充たすことであると見る。又或る者は經濟は物質的感覺的生活であり、社會を活動舞臺とするのも結局は箇人の肉體的生活の満足に歸着するが、道德は精神的理性的生活であり、箇人の性格に

根據を置くらば結局は社會の中に自己を實現するにあつて、經濟は道德に適從すると見る。更に或る者は、二者共に廣義の善を實現するのであるが、道德は第一義の自立善を實現し經濟は第二義の附屬善即ち有用又は效用を標準となし、後者は前者の條件となると見るのである。是等三様の所見も歸する所は道德と經濟とが吾人の生活に於て範圍を異にし而かも其間に主従の關係があるとなすのである。

此種の見解は寧ろ道德論者に多く存し、倉庫實つれば則ち禮節を知ると云へるは此種思想である。惟ふに我等の生活には目的と見ゆるものと手段と見ゆるものととの區別が存して經濟生活は後者に屬し、又生活の目的又は理想を決定し遂行することが道德上の問題なることは疑ひない。されど目的に對する手段を單に方法と見す一の目的に達する爲めの前提と見るときは、目的が道德的判斷を受くると同時に手段も亦同様に道德的に取扱はれなければならぬ。經濟生活は道德生活に入らずと云ふを得ない。又經濟を物質的肉體的生活に止めしめ道德を精神的理性的生活に限ることは只だ專斷的に道德の範圍を狭く限定せるまでであつて我等の道德意識から出發したものでない。よし物質的肉體的生活であつても其を道德の外に置くと云ふことは常識さへも許さない。更に道德は自立善を、經濟は附屬善を實現するものと見るは論理上の批難は免れ得るとしても此亦道德の概念を根據なく限定したものである。實際生活を省みるときは經濟行爲の中にも歴然と

して自立善の實現され居ることを感知し得べく勞働や施與の如きは單に其の表現の外形に過ぎないと思ふことも出来る。殊に現今の如く箇人の全生活に影響し全社會の運命をも左右せんとするほどに重大なる意義を有する經濟問題を指して輕々しく道德の付屬品と見るは甚だ穩當を缺くと云はなければならぬ。孰れにしても道德と經濟とを生活内容の相違と見るときは一の行爲は道德行爲か經濟行爲かの孰れか一に屬し、經濟行爲には道德問題が生じない結果となる。よし道德を狹義に解し謂ゆる一般道德のみに限定するとしても、經濟生活が人生の一部たる限りは道德の範圍より逸し去るを許されない。經濟は道德以外の方面よりも觀察せられ得るが道德を離れて存立することは出来なと思ふ。

其二 生活價值より見たる道德と經濟

此見解は道德と經濟とを區別するに吾人が生活上實現する所の價值若くは執る所の主義の特質を以てし、外形上同一様な行爲も道德上より見ると經濟上より見るとは其の意味を異にするとなすのである。例へば非功利論者は、道德は義を旨とし經濟は利を主となすと言ひ、功利主義者は道德は利他に即き經濟は利己に即くと説き、又謂ゆる經濟主義や貨幣價值を標準として經濟の特質を擧げ以て道德と區別するが如きが其である。人を奴隸となし或は勞賃を以て拘束するは人格を無視し或は輕侮する惡事なりと批難するは道德的判斷に屬し、之を自己又は社會にとつて生産

能率の増進を妨ぐる不利の所爲なりと排斥するは經濟的判斷に屬すとなし、又慈善施與に就ても道德上よりは之を人格毀傷の惡事と評し、經濟上よりは貧民増加の一惡因と評するが如く各別の價值判斷を下すは孰れも價值又は主義の上より道德と經濟とを分つ見解である。此の二重價值の見解は寧ろ經濟論者に多く行はれ、常識としても彼の「營業は營業なり」と云ふ標語が示すが如く此見解を受納れて居る。封建時代の嚴重なる階級制の下に於ては實業家階級は或程度まで道德上の拘束を緩められ今も幾分其遺風が残つて居る。又宗教的道德に於て富を呪咀する聖訓の如きは道德と經濟とを別箇の價值として取扱ひ而かも二者は相容れないと考へて居る。「アダムスミス」の「道德情操論」と「富國論」とに於ける立場も一の二重價值觀である。

此の見解に依るときは、若し道德と經濟とが互に縁無き價值や主義に據るとすれば二者の間には何の關係も成立しない。併し斯の如きは二重人格に導く不通の見解であり、又實際生活に於ては二者は相交渉し、而かも必しも相容るゝとは限らない。「富まんとすれば仁ならず、仁ならんとすれば富まず」と言ふは其であり、「プラトーン」は「理想國」の中に、「富と道德とを天秤に懸くるときは一方が上れば他方が下る」と言つて居る。其處で多くの人は心に道德を念じ身に經濟を行ふ。斯くて小人は世を欺き君子は己を欺く。然らば如何にすれば此の詐欺より免れ得るか。他なし只だ二重價值觀を捨つるにあるのみ。

余の見る所にては二重價值觀に立てる道德と經濟との區別は、道德及び經濟其ものゝ區別でなく實は一定の道德觀及び經濟觀の區別に過ぎないと思ふ。利己主義も一の道德觀として成立し得べく、經濟生活も力さへ許せば利他主義に據りて營み得べく、又其が利己よりも進んで居る。又經濟生活は必しも功利の上に出でないとは限らないし又其方が一層望ましく、功利主義と雖も之を道德の外に追ふとすれば道德思想殊に實際の道德生活の大半は失はるゝであらふ。尙ほ又謂ゆる道德と經濟とが衝突するときはやはり經濟を抑へて道德に據る外はあるまい。我等が實現せんとする高級價值は眞、正、美、善の四つに止まり、經濟は必然に善價值の實現たる道德に趣かねばならぬ。最高絶對の價值を實現する宗教も現實的には相對界に下つて如上四者の孰れかの價值を實現するのであり、其が善惡の規範を垂るゝ限りは道德に歸屬する。斯く見るときは道德と經濟とが別箇の價值や主義に據つて立つと云ふ見解は支持し得られないことになる。要するに一定の道德觀や經濟觀が直ちに道德や經濟ではない。我等は規矩を使用する前に先づ規矩を當てらるべき目的物の何たるかを認め置かなければならぬ。

其三 生活の規範及び方面としての道德と經濟

此見解は道德を以て生活一般の規範となし經濟を以て生活内容の一部面となすのである。即ち道德は生活の各方面を通じて人が人として當然に要求せらるゝ、行爲の規範であるが、經濟は政治

衛生、教育等と並んで限定せられたる目的を有する生活の一部面を指すのである。故に二者は其々生活上の意義を異にするが經濟生活を支配する道德に於て同一の場所を占むることとなる。道德は凡ての行爲の一般規範を與ふる點に於て經濟を包含すると同時に其以外にも幾多の生活部面を其範圍に收め、經濟は他の生活部面と共に道德の傘下に立つが道德上の規範及び其實行の外に尙ほ他種の行爲の規矩及び其實行を留保して居る。

斯の如く一般道德を其のまゝ經濟生活に適用し經濟行爲の規範を道德の中に求むる見解は近代の倫理學者并に經濟學者の間に見る所にて、二者の立場は著しく接近して來た。「パウlsen」¹⁾が其倫理學に於て經濟生活を論するに當り「全く資本に由つて衣食する者は盜賊なり」と論斷せるは社會主義經濟論の所見と相通じて居る。「マーシャル」²⁾の見解は餘程微温的であるが尙ほ是處に收むべきものであらふ。氏の説は或程度まで英國傳統の學説を尊重し、且つ實際に於て經濟生活に對し高き標準の道德を要求するの困難なるを慮つて居るやうである。「ワグナー」³⁾の有名なる動機論は明かに此の第三の見解を執り、經濟生活の倫理化を高調して高級の道德的動機をも經濟生活に擬して居る。「スミス」の「經濟的道德主義」⁴⁾は其の道德主義の當否は大に争はれ得るも經濟生活を全然道德の原則に據つて改造せんとする全卷の主張は最も明瞭に此の第三の見解たるを示し且つ現代社會思潮の有力なる傾向を語るものである。

1) Paulsen, System der Ethik. B. II. S. 57.

2) Marshall, Principles of Economics B. I. Chap. II. § 4-7.

3) Wagner, Grundlage d. Volkswirtschaft. B. I. K. I. Abs. 2. 3.

4) Smith, Economic Moralism.

此種の見解は道德と經濟とを正面より見て各者の特徴を把握したるものなれば第一及び第二の見解の如き無理を生じない。吾人は大體に於て此見解に賛同する。然れども我等の生活の規範には各方面の生活を蔽ひ盡す所の普遍的規範と一定の限定せられたる目的を有する各部面の生活のみに存する所の特殊的規範との二種あつて其等が經濟生活に如何に現はるゝかを明かにしなければならぬ。前者は狹義の道德たる普遍道德であるが、生活の普遍的規範たる以上は經濟生活が之に則るを當然とすることは言を須たない。經濟問題は要するに倫理問題であると云ふのは其點から來るのである。同時に又經濟生活が他種の生活部面と異なる獨自の目的を有する以上は他方面に通せざる特殊の規範が存する譯である。之をも道德と呼ぶべきや否やは問題であるとして經濟生活に於ける普遍と特殊との二つの規範を明確に分つて其々の意義を定むることは、道德と經濟との關係を正しく解する上に於て必要であると思ふ。

以上吾人は道德と經濟との意義及び關係に就て三様の見解を略述したるが、要するに二者は決して第一及び第二の見解の如き對立的關係に立つものでなく、寧ろ第三の見解の如く一體の生活に於て異なる見地から相交錯し、道德より見た經濟生活若しくは經濟生活に於ける道德と言はるべき關係に立つものである。而して吾人は經濟生活を律する道德の中に普遍道德と特殊道德との

二つを包含せしむるのである。普遍及び特殊の何たるかに就ては種々に異つた見解もあるが、吾人の見る所を言へば、普遍とは全般を成すべき各箇に行き亘り相通じ而かも全般に具はる所の性狀を各箇の見地より概括的に見たるものであり、又特殊とは同じく全般を成すべき各箇が其々に分有して互に相通せざる所の性狀である。されば特殊を如何様に集めても特色は依然として存し決して普遍とはならない。又普遍を如何様に割いても其は單に各箇に就て語らるゝに止まり決して特殊とはならない。二者は對立して孰れの一よりも他を導くことは出来ない。吾人はこの意味に於て先づ經濟を包含する所の普遍道德を論じ其が如何に經濟を律するかを考へ、次に普遍道德に入らざる所の特殊の經濟道德に論及したいと思ふ。

五 普遍道德

倫理學の素養極めて貧弱なる者が道德の一般論を試むるは甚だ無謀の企であるが、經濟道の意義を基礎付ける爲めには已むを得ず其處に論及しなければならぬ。只だ此の一小篇にとつては過大の嫌ある問題を論するのであるから所見は未熟に了り説明は簡約に失して徒らに讀者を煩はすに過ぎないことを恐るゝのである。

凡そ道德の問題は大別して二つとなる。其一は道德上の判定を受くる對象を認明すること、其

二は其對象に就て道德上の判定をなすことである。一は道德上の存在の問題であり、他は道德上の價値の問題である。

其一 道德上の判定の對象

道德上の判定の對象は行爲であると謂はるゝ。されど行爲は意志と動作とより成り、而して意志の奥には其基調をなす所の我性があり、動作に基いて其より來る結果がある。道德上の判定は此の我性、意志、動作及び結果を通じて行はるべきである。然れども動作と結果とは意志の表現であるから、其等が意志と一致する限りは意志の判定を以て事足るべく、其等が意志よりも狭く現れたるときは尙更意志を問ふを以て足り、又其等が意志よりも廣く現れたるときは意志の限界に於て判定しなければならぬ。法律其他の社會法に於て往々豫戒又は獎勵の目的を以て殊更に結果に着眼する見解は社會政策より見たる特殊道德としては是認せられ得るとしても普遍道德に於ける結果論は正當でない。其は功利主義に見る所の結果論に就ても同様の論法を以てすることが出来る。

普遍道德上の判定の對象として吾人は、我性と意志とを探る。我性の造語は聊か奇異に聞ゆるが之は行爲の際に現存する所の行爲者の自我の狀態を假りに斯く名づけたのである。我性は之を其の本位と實質とに分けて見る。我性の本位と云ふは行爲に於て吾人の懷く所の意志が何者の爲め

に、何者の上に志向上の結果を歸せしめんとして、何者の價值を標的として發動するかによつて定まる所の行爲者の立場を指す。調ゆる自己本位、國家本位と言ふが如き類である。我性の實質と云ふは行爲に於て意志が發生し來る所の「我」の意識内容の性質を指す。如何なる素質の「我」が行爲に出づるかに由つて其の受くる所の判定を異にする。要するに我性に於ては行爲が何者の爲めに何者としてなされるかを見るのである。次に意志は之を意力と志向とに分けて見る。意力と云ふは行爲中にありて動作を發生持續せしむる決執力を指し、志向とは行爲に於て企圖する志境又は目的觀念を指す。意力は進行の動力にして志向は進行の方向である。二者相須つて意志となり行爲の意義を決定する。是處では心理學や倫理學に於て說かるゝ欲求、動機、思慮、決意、執意、志向等の種々なる精神作用の種類及び階段に關する複雑なる學說を差措いて、單純に上述せる我性の本位及び實質并に意志に於ける意力及び志向の四つを以て道德的判定の對象を説明して見たい。こは全く一の未熟なる試みに過ぎないから切に先賢の指教を仰ぎたい。

I 我性の本位

我性の本位に就ては是まで主我と沒我との二つに就て爭論が行はれて居る。(此場合に余は利己及び利他の語を避くる。此等は功利を志向とする主我又は沒我の意味に用ゆること可とする。余は後に述ぶる如く功利以外に人格を志向とする主我と沒我とを認むるが故に我性のみに就て言ふ

ときは主我及び沒我若くは自主我及び他主我と呼ぶ。是まで主我及び沒我到就て種々の爭論を生じたる主なる原因は此の二者の意義が論者によつて異れる故でもあるが、其他に我性の本位を此の二つに止めて別に一層大切な我性の本位を明確に承認することを怠つたからであると思ふ。

抑も主我とは、簡體としての自我を本位となし其他は凡て此の本位の爲めに存在の理由を有すとなすものである。沒我とは之に反し、簡體としての自我を沒却し其自我以外の實在を本位とし其爲めに思ひ其爲めに行ひ自我は其他者の爲めに存在の意義ありとなすものである、主我は己を主として他を従とし下級の他者を所有せんとし同級の他者を支配せんとする。沒我は簡體としての自我を従とし他者を主とし同級の他者を愛護し上級の他者に奉仕せんとする。主我は上級を認めず、沒我は下級を認めない。而して主我たり沒我たる特質は結局に於ける價值の本位に由つて定まり茲に至る經路や行動の外形に存しない。強いられ又は買はれて他者の爲に働くのが沒我でないと共に他者を喜ばすが爲ならば自己に着く幸福を求めても主我ではない。又主我と雖も存在としての他我を否認しないと同様に沒我と雖も存在としての自我を否認することはない。唯だ價值より見て一は自我を主とし他は自我の至上權を自ら喜捨するにある。

主我と沒我とは共に相手を豫想したる相對觀の我性である。然るに其以外に吾人が獨り散歩し讀書し風景を賞し瞑想を凝らすが如き、自己の爲めとも他人の爲めとも思はず自然のまゝに溢れ

出づる原始的の活動態度がある。之をも主我と名づくるは妨げないとして自己本位の意識的活動とは著しく趣を異にすることは認めなければならぬ。余は之を主我より別けて、獨我と名づく。獨我心はやはり事實としては自我の爲に動くものであるが、行爲者の價值の本位より見るときは其他の對立する世界に出づる以前の世界に住む天真爛漫の嬰兒である。學者や美術家は成人となつても此の嬰兒の心が存する。死に瀕する慈母の病床に付添へる場合にすら抑へ難き思索に耽ることがある。今永眠に就ける愛兒の惱みなき死顔を見たるときに慟哭するよりも先づ心急しく其の「マスク」を取ることがある。其等は普通の人情すら缺ける主我者の如く見ゆる。併し斯かる場合には自己と近親との間にさへ何等の人格的交渉がない、唯我獨行の態度を見るのみである。我性が成熟し始むるとき獨我より主我に進み簡體としての自己を本位となし他の簡體を自己に従屬せしめんとする。二つの主我心か同一の志向を懷いて出合ふときは必ず相爭ふ。其結果は征服か妥協かに終る。然るに簡體我の力は想像せるよりも遙かに有限微弱であり、妥協は勿論征服さへも極めて不安危殆の狀況にあつて、主我の諸行は總て無常なるを感知するときは心機一轉して沒我に移る。

沒我に入りて主我の苦惱より解脱する。沒我心は何人にも同情し同意して世界到る所に近親を有する。されど如何に親むとも他人は他人である。主我を絶つと云ふ限りに於て心に平安を感ず

るも其は要するに消極的意義を有するに過ぎない。我等は如何に變轉しても結局は肯定に復歸しなければ不動の安心を得ない。其處に沒我の悲哀がある。又我等は隣人を愛し或は聖者に仕ふると思ふも實は唯だの隣人や聖者に向ふのでなく一は分散的に他は集中的に其奥に宿させる全體我に全體我を結び付けんとするのである。自己に對し他者と思はるゝものは實は自他の箇々を總ぶる所の全體我の住家に外ならない。而して自己も亦其の住家の一つであつて全體我を宿ぐす光榮を有すと知るときは、沒我は去つて復た自我を肯定する最後の我性に到達する。之を假りに、**全我**と名つくる。全我も亦全體我を沒却する限りに於ては沒我であるが、沒却したまゝにて他者を價值本位として愛護又は奉仕の態度に出づるものと自他を超越して全體を價值本位とし、其下に自他を第二次的價值として配置するものとは、我性の本位としては明かに之を分別する必要がある。其は恰も獨我と主我とを分別するが如きである。殊に我性の本位としては、獨我と全我とは絕對性を有し、主我と沒我とは相對性を有する。原始的絕對性の獨我から起り究竟的絕對性の全我に達する間に開展的相對性の主我と反動的相對性の沒我とが介在する。其が我性の本位の發達である。故に單に主我と沒我とを對立せしめ又は自利利他圓滿と稱するだけにては我等の複雑なる道德生活を解釋するには決して充分とは云へないと思ふ。

II 我性の實質

我性の本位と相並んで重要なる道德的判定の對象となるものは我性の實質であるが、是まで主我や沒我に就て種々に論議せらるゝに反し、我性の實質に就ては余の寡聞なる故でもあらふが餘り纏つた見解が見當らないやうである。従つて此點に關する私見は他の部分に比し一層未熟粗雑であるから今は簡單に其の要領を擧ぐるに止めて置きたい。

吾人は我性の實質として先づ欲、我及び純我と假りに名づくるものに着眼する。「ゼームス」の説によると、自我には經驗我又は客觀我と純粹我又は主觀我 Empirical Self or Me and Pure Ego or I の二つがある。前者は意識せらるゝ自我であり後者は意識する自我である。客觀我は物質的(肉體的并に財物的)、社會的、及び精神的の三種のものを包含し、其等は自我の一部をなす。我等は其等に對して得意失意の自己評價をなし其等を求めて自己保存及び擴充をなす。之に對する主觀我は飽くまで知らるゝ對象となることなく唯だ知る所の純粹の自我である。主觀我は心理學的に見れば單に意識状態と言ふ外はないが、其の意識の流れに於て客觀我を所有する主人公となるのである。余は始め我性の實質に就て漠然たる考を持つに過ぎなかつたが「ゼームス」の所説によつて大に開發された。「ゼームス」は「知る」と云ふ見地から客觀我と主觀我とを分別したが、吾人は之に倣ひて「爲す」と云ふ見地から欲我と純我とを分別して見たい。

「ゼームス」は主觀我を以て意識状態となし、形上而學では之を一の實在せる靈魂と見ることが出來ても心理學では其が許され

ないと言つて居る。併し氏も此點に就ては最後の解決を留保し、又意識の流れなほ純粹我又は主觀我として他種の自我と對稱せしめて居る以上は、心理學上の説明としてはともかく道德的判定の對象として取扱ふ場合には純粹我も亦一の「モノ」であるとして差支ないと思ふ。従つて余は欲我も純我も共に「モノ」としての自我であるとする。

他と交渉せしめないで單に自我のみを見るときは、其は爲す者であつて爲さるゝ物でない。されど均しく爲すに於ても肉體的、物質的、精神的、社會的の孰れにあれ何物かを自己に齎すことを目的として爲す場合と然らざる場合とがある。前の場合には爲されたる結果としての或物が自我の一部と感ぜらるゝことは其が「ゼームス」の謂へる客觀我である。之を行動の方面より見れば、吾人が何物かを求めんとして活動するときは其の欲求の心即ち自我なりと感ぜらるゝ。其は意識の對象となる客觀我よりも一層自我と感ずる程度が強い。爲す我と爲さるゝ目的とは區別して考へられながらも二者は不二にして離れない。例へば財物や智識や權勢や名譽などの外物を欲求するとき、其欲求者即ち自我と感じ、欲求無ければ自我無きに均しく、自我は之を欲求の過程中に意識する。蓄財に没頭するとき蓄財者即ち自我となり、戀愛に熱中するとき戀愛者即ち自我となる。我等が外物に眩惑されて之を欲求するときは、欲求の主體としての自重を失ひ、欲求の對象に自我が乗出し對象の中に自我が宿り、欲求の對象に囚へられて自ら對象を擒縱する力なく却つて對象の方から自我が操縱せらるゝれ、謂ゆる物を役せず物に役せらるゝのである。此の状態に於ける自我を稱して欲我と謂ふ。欲我と雖も爲す自我である。されど爲す者が爲さるゝ物

を追ひ廻つて唯だ其の物の上にのみ爲すのである。極端に謂へば、致さんとして却つて致さるゝの類にて、自ら爲すと信じながら其實は外物によつて自己が爲さるゝのである。

欲我は外物に對する欲求として動く。外物は雜多である。従つて一齊に多くを追求して或は矛盾の窮地に陥り或は精力の消耗を告げ、若くは一より他に轉じ廻りて奔命に疲れ而かも終る所を知らない。此の生の輪廻に惱めるとき若くは其苦惱を豫見するときは、徒らに欲求するの愚を悟り外に對する進動を抑へて内に於ける安靜を保ち偏へに求めざらんとする態度に轉ずる。欲求に熱する心が冷めるときは欲求の主體と客體との區別が段々と明かになつて行動の上に現はれ、自我が自我の行動の對象を對象として評價し處置する餘裕を生ずる。其の餘裕から其まで欲求の雲霧に包まれ居たる眞に爲す所の自我の本質が顯はれ來るときは、其の自我性を稱して純我と謂ふ。或男が内亂によつて一切の財産を失ひたるとき、塵埃の中に伸々として生れて以來斯の如き自由幸福を感じたることはないと叫んださうである。彼は偶然の事件によつて欲我より解放されて純我に目覺めたのであらふ。眞の生活は放棄よりと始まると云ひ、一切の所有を捨てゝ我に従ひ來れと云ふが如き類の聖訓は欲我より純我に移れと告ぐるのである。欲我も純我も自我たるに於ては同一である。唯だ純我の自覺されざる間は、其地位が欲求によつて占めらるゝのである。「ゼーハス」は意識の方面より客觀我と主觀我とを別つたが、之と見地と意味を異にしながら氏に倣つ

て謂へば吾人は行動の自我に就て客體我と主體我とを別ち得るのである。

我性の實質としては如上の欲我及び純我が成熟せる人々の間に最も廣く認めらるゝ。されど進んで考ふれば欲我以前及び純我以後に尙ほ二つの我性の實質を認め得る。欲我は外物を追求し純我は内心に立籠る。通じて見れば二者は内外孰れかに重きを置く差別觀の上に立つて居る。然るに精神發達の初期にありては、行爲こそ意識的であれ我性に於ては内心外物無差別の状態にあつて、自我其のもの、活動と外物の獲得體持の活動との間に意識上の區別なく、一の中に他が包含されてある。例へば衝動のまゝに食を求め之を口にすることが如く一々の行爲には目的觀念があつても一定の目的を立てゝ之を追求すると云ふ自我の態度が出来て居ない。我性の實質は單に自我の活動を意識するのみにて活動の内容に關する自覺がない。我は斯く爲すとは考ふれども我は何の爲めに何に對して爲すかに就ては客體我と主體我との未分以前の混沌の状態にある。斯かる状態にある我性を假りに名つけて原我と謂ふ。原我は小兒の心の如く行動する者即ち自我であり、行動の對象が自我の中に含まれ、我と我が物との區別が明瞭でない。然るに原我が箇々の行動に於ける異なる對象に接して其異同を辨別し、又行動が意の如くならざるを機會として對象が自我に對して嚴存することを知るに及んで漸次に欲我に進んで來るのである。然るに又其欲我は内心外物の差別を認めて欲求の形式をとるも、外物に拘はり之に没頭して未だ自我の眞の獨立を味ひ得

ない。此の自我の動搖を鎮定せんとして自立の自我を純我に發見するのである。

純我は欲我の反動として深く内面に向つて進み、従つて外に對する發動を厭ひ内に籠つて門戸を閉鎖する。欲我の見たる價值は純我に於て否定さるゝことあり、又顛倒さるゝことさへある。

欲我は外物を吸引するに急しきも純我は之に反して外物を排斥して謂ゆる爲さざるを以て爲すと云ふ態度を執る。然るに生命は無爲を許さない、又箇體としての獨居をも肯じない。斯くて我等が欲我への退轉を免れ得る方あらば、自ら進んで最後の我性に到達し得る。其は自我の核心に達して内に純我を確保し外に欲我を淨化し、外物を欲求しながら一の系統に據つて行動し自我の安定を保ち得る我性となる。吾人は之を名づけて假に統我と謂ふ。欲我は主體の自重なく容體に没頭する轉動我であり遠心我である。純我は客體を拒否して主體に固着せんとする不動我であり求心我である。統我に到りて始めて内に定住して動かす外に進動して而かも客體と同心する。純我のみが所有者であつて有らゆる所有物に對する。原我は所有者と所有物とを別たざる以前の自然我である。欲我は之を別つても所有物を追ふ餘りに之に自我を投影せる色我であるとするれば、純我は所有を否定して無一物處に居る實體の法我とも謂へる。統我に至りて始めて所有者と所有物とを明確に區別し且つ所有しながら取捨自在なることを得るのである。(未完)